資料３－３

平成 30 年度政策創造員会議　中間報告（WG2）

１　研究テーマ（未来の三重県のめざすべき姿）

“宣長に学(まね)ぶ　若者たちに選ばれる三重づくり”

２　研究概要

全国と同様、三重県の人口は減少傾向にあるが、三重県では特に若年者層の県外流出が人口減少の大きな要因となっている。この状況が続くと、2030 年には、川越町・朝日町を除く全市町で人口が現在より減少すると予測され、さらに、2040 年になると 18 歳人口が現在の３分の２に減少すると推計されているため、2030 年の段階で若者の県外流出防止の手法を確立させることが強く求められる。

若年者層の県外流出は、「学び・働く場」を県外、特に大都市圏に求める傾向が要因としてある。では、若者たちが大都市圏ではなく三重県を選択するにはどのようにすればよいか。

三重県を代表する偉人の一人である本居宣長は、現在の松阪市の商家に生まれ、23 歳から５年半ほど京都で医学を学んだ後、松坂に戻り、医師として地域に貢献する傍ら、独自の方法で日本古典の研究などに情熱を注ぎ、それまでの固定観念から脱却した日本人の価値観や考え方を探求し、大きな功績を残した。

この宣長の生き方は、三重県出身の若者が三重県での暮らしを選択し、自らが情熱（パッション）を注ぐ事柄に取り組み、充実した人生を送るという意味で、これからの三重県がめざすべき理想的なモデルとなる。

本研究では、2030 年に生誕 300 年を迎える宣長の生き方にフォーカスし改めて学ぶとともに、2030 年頃の若者たちの学び・働き方からバックキャスティングし、求められる環境を整えるために、宣長の生き方から得たヒントを生かし、2030 年頃の若者が学び・働く場として自ら三重県を選択し、それぞれの情熱を傾ける事柄に思う存分取り組み、より充実した人生を送ることができるようになる方策を検討する。

３　研究課題

（１）めざすべき 10 年後の三重県の姿（理想像）と現状の延長線上に予想される三重県の姿

【めざすべき 10 年後の三重県の姿（理想像）】

若者たちが自ら「学び・働く場」として、大都市圏に活躍の場を求めるのではなく三重県を選択し、それぞれの情熱（パッション）を傾ける事柄に思う存分取り組み、より充実した人生を送ることができるようになっている。

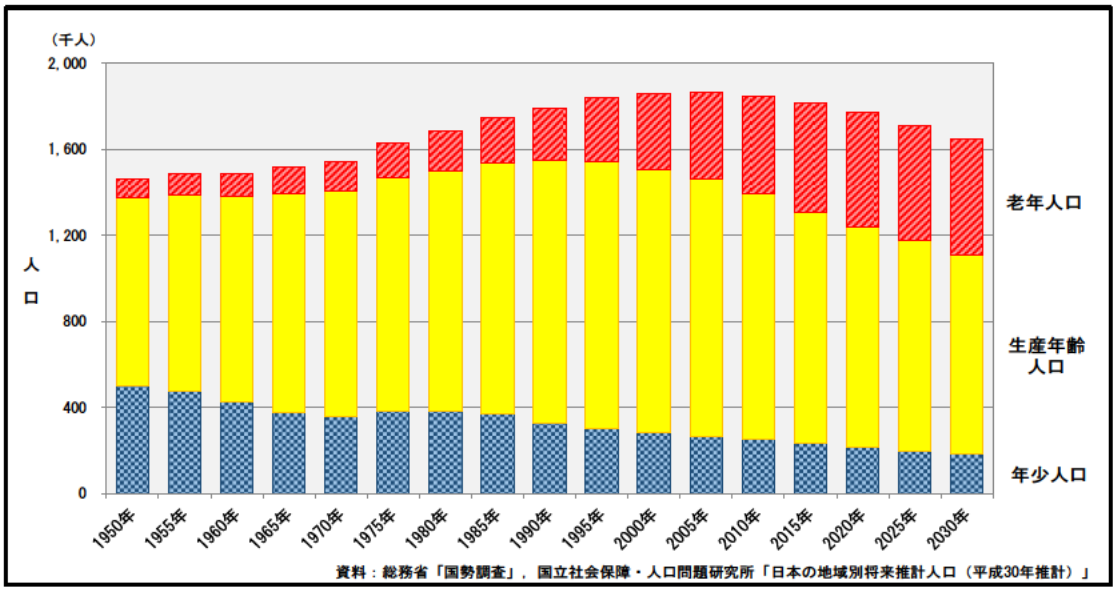
その結果、三重県が若者たちに選ばれることで、三重県の人口流出が抑制され、たとえ人口減少が続くとしても、若者たちが生き生きと暮らしている。

【現状の延長線上に予想される三重県の姿】

2030 年頃には、ICT 技術などのさらなる発達やリニア中央新幹線の一部開業などにより時間的・距離的制約はさらに解消されると考えられる。これにより、どこでも学び働ける環境整備が進むと考えられるが、このことは、若者たちが地元にとどまるよう作用するのではなく、より県外流出を加速させる要素になると考えられる。現に、10 年前よりも ICT 技術が発達し交通網の整備が進んでいるにも関わらず、都市への人口一極集中は進んでおり、どこでも学び・働けるなら、より利便性の高い都市部への人口集中は進むと考えられる。

また、一度県外へ流出した若者が、そのまま、県外に活躍の場を求める傾向も強くなると考えられる。

（図１）年齢区分別に見た三重県の人口推移



＜三重県の現状＞

○進学先を選択する際の現状

・進学に関する「高校生・保護者アンケート調査」（平成 26 年 12 月県実施）では、生徒、保護者ともに、県外の大学へ進学する際に重視する視点として「専攻したい学問分野」をあげている。

・平成 29 年度の「学校基本調査」によると、県内の高等教育機関の状況として、各県の 18 歳人口に対し、自県内の大学入学枠がどれほど用意されているかを表す大学収容力指数について、三重県は全国ワースト２位（44.7）となっており、学びたいことを学ぶ場としての環境が整っていないことを表している。（表１）

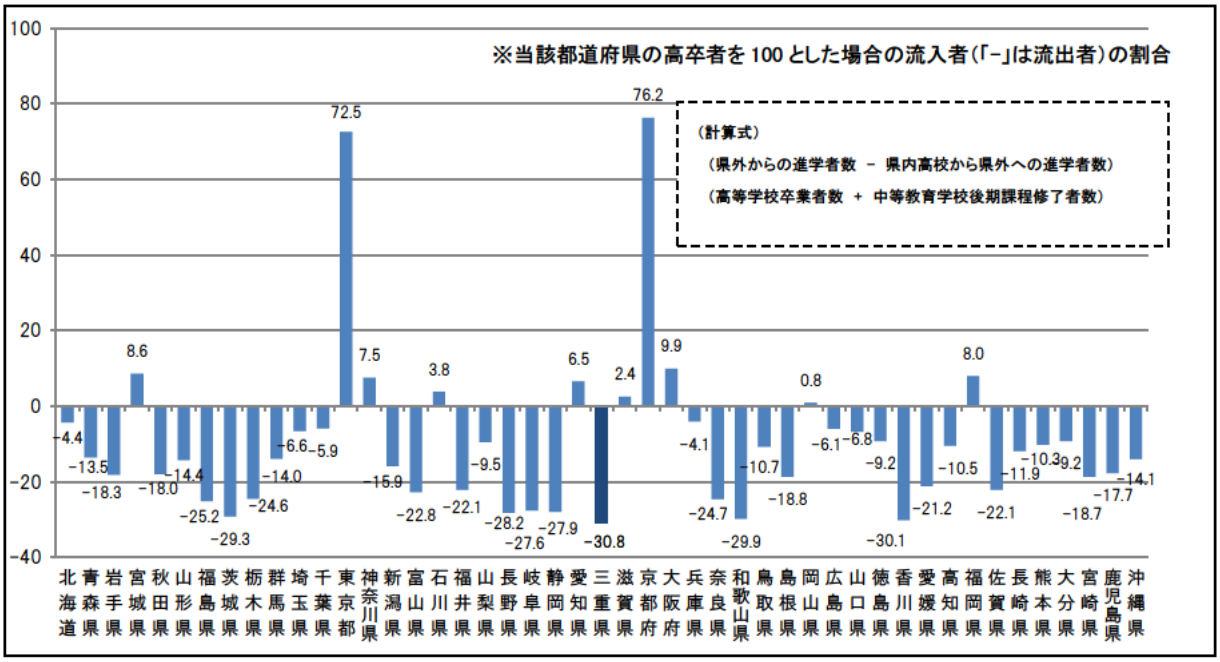
・また、同調査によると、大学進学時の流出の割合は全国で最も高い。（図２）

（表１）大学収容力指数の状況

順位	都道府県名	上位５都道府県			順位	都道府県名	下位５都道府県		
		H17年度	H22年度	H29年度			H17年度	H22年度	H29年度
1	京都府	262.5	249.0	237.0	43	静岡県	52.9	48.4	51.5
2	東京都	249.4	237.3	234.0	44	長野県	46.8	42.9	49.3
3	大阪府	159.1	143.5	134.6	45	福島県	54.9	46.5	48.3
4	宮城県	144.9	132.2	133.1	46	三重県	44.3	42.7	44.7
5	福岡県	143.1	136.6	131.5	47	和歌山県	39.0	39.3	42.9

※大学収容力指数＝大学入学者数×100／高卒者のうち大学進学者数（前年度）
出典：文部科学省「学校基本調査」を元に三重県作成

（図２）大学進学時の都道府県別流入・流出率（平成 29 年度）



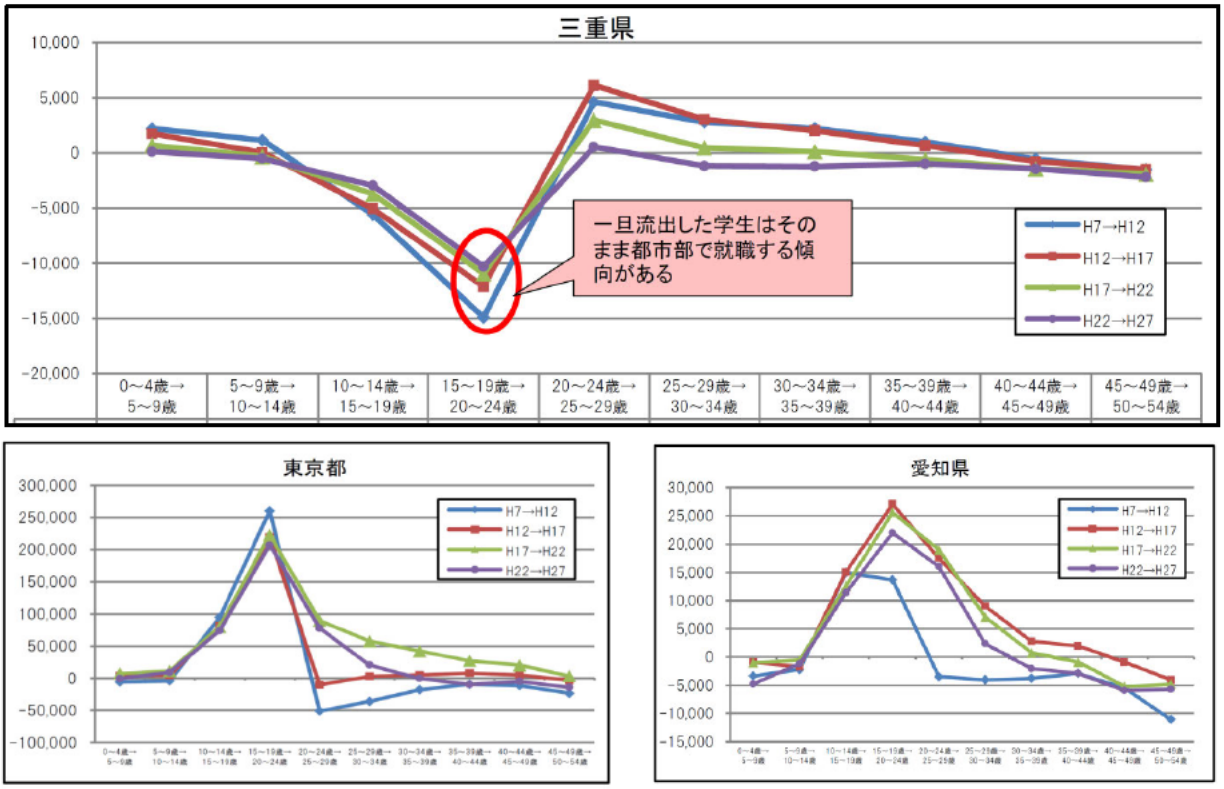
出典：文部科学省「学校基本調査」を基に三重県作成

○就職先を選択する際の現状

・三重県では若者の県外流出が認められるが、逆に東京都や愛知県といった大都市圏では若者が流入している。一旦流出した学生はそのまま都市部で就職する傾向がある。（図３）

・県内の有効求人倍率は、1.75（平成 30 年 6 月）であり、決して就職先が不足している状況ではない。

（図３）人口流出・流入の状況（三重県、東京都、愛知県）



出典：総務省　国勢調査

○三重県の取組

「三重県まち・ひと・しごと創生総合戦略」に基づき、「学ぶ」「働く」というライフシーンにおいて、「三重県で学び、働く若者の増加」をめざした取組として、以下の取組が行われている。

・高校生の地域活性化の取組への参画
・学びの選択肢の拡大、県内高等教育機関の魅力向上・充実
・奨学金の返還支援を通じた若者の県内定着の促進
・Ｕ・Ｉターン就職等の促進
・キャリア教育を通じた県内定着の促進

（２）発見した問題点

現在の三重県の取組は、全国で取り組まれているものと同様の内容が多く見受けられ、それが若者の人口流出の抑制という結果につながっているとはいいがたい状況にある。若者にとっての魅力的な「学び・働く場」の醸成につながるような、三重県の環境に適応した施策に乏しい。

若者が充実した人生を送るために、自ら三重県を選択するようにするためには、より三重県の環境に適応した施策に取り組む必要があるのではないか。

（３）課題設定

「学び・働く場」として、若者たちに三重県を活躍の場として選択してもらうためには、若者のニーズや三重県としての強みを把握し、それを生かした若者に魅力的な環境整備の施策を検討する必要がある。

4　研究目標

現代よりも時間や距離の制約が大きかった江戸時代において、三重県での暮らしを自ら選択し、情熱（パッション）を注ぐ事柄に取り組み、充実した人生を送った本居宣長の生き方に学び、若者たちが自ら「学び・働く場」として、大都市圏に活躍の場を求めるのではなく三重県を選択し、それぞれの情熱（パッション）を傾ける事柄に思う存分取り組み、より充実した人生を送ることができるようになる方策を検討する。

5　研究内容

（１）本居宣長の経歴及び業績

①宣長の経歴

本居宣長は、享保 15 年（1730 年)に伊勢国松坂（三重県松阪市）の商家に生まれた。16 歳の時に江戸で商売の修行に出るが、商売に関心がなく 1 年で松坂に戻った。江戸から戻って約 2 年半は、日本地図の作成や和歌の勉強など自らの関心が赴くことに没頭し、周囲の目は冷たかったが、京都と和歌への関心が芽生えた。行く末を案じた母の勧めにより、医師となるために 23 歳で京都へ行き、京都に 5 年半滞在し、医学とともに儒学を学んだ。

28 歳で松坂に戻り医師を開業し、町医者として地域に貢献した。帰郷してまもなく 29 歳の頃、松坂の歌会に入会し、会員らを対象に「源氏物語」の講釈を始めた。この頃から、日本人本来の世界観や価値観を探求しようと考え、そのためには「古事記」の解釈が必要であると考えるようになった。

34 歳の時に江戸の国学者・賀茂真淵と松坂で対面し、門人となった。「万葉集」について、書簡でのやりとりをしながら真淵の指導を受けるとともに、自ら「古事記」の研究に着手し、以降 35 年の歳月をかけて「古事記伝」を執筆した。

なお、私生活においては、30 代前半で結婚し 2 男 3 女をもうけ、養子を 1 人迎えている。

この宣長の生き方を現代風に言い換えるならば、23 歳で県外の大学に進学し、29 歳で地元に戻って働きながら地域に貢献し、30 代半ばで本業とは別に「古事記」というライフワークを見つけ、60 歳からはライフワークに専念するという生き方をした。

②宣長の業績

宣長が「古事記」の新しい見方を示したということは歴史に残る業績として広く知られているが、宣長の業績はそれだけではない。

学問をする者の基本姿勢を提示し、それを実践した人物でもある。研究において、資料は公表されなければならない、成果は発表し、活発な議論と論争が学問を進めていく、学問は一人の力では完成させるものではない、その上に立っての学問の継承について、宣長のように明言し、実践した人はそれまでにはいなかった。

また、平成 29 年 10 月に、本居宣長をテーマに開催された「宣長サミット」では、一般財団法人日本総合研究所会長の寺島実郎氏が「日本人が『日本』を意識するという意味においても大きな役割を果たした。時代の固定観念から脱却し、ある種の自由人として、時代の変革者として、日本人自身の価値観やものの考え方というのは何かということを、深く静かに掘り下げて研究した。儒学という価値観で凝り固まっていた時代に、日本人のものの見方や考え方がどうあるべきか、ということを提示した。」と述べている。

（２）宣長が松坂で偉業を成し遂げることができた理由

上記のとおり、宣長は、江戸へ商人になる修行に出たものの自らの性分に合わず松坂へ戻り、京都で医学を学んだ後に松坂に戻り、医師という本業の傍ら、自らのライフワークである「古事記」の研究に情熱を注いだ。江戸や京都に活動の拠点を移すことをせず、松坂を拠点にして働き、学び、充実した人生を送ったといえる。

なぜ、大都市である江戸や京都ではなく松坂を拠点として活動したのか。実家を継ぐためという理由ではなく、あえて松坂という場所を選んだ理由はあったのか。なぜ、宣長は情熱を注ぐことに思う存分取り組むことができたのか。現代よりも時間や距離の制約が大きかった江戸時代において、なぜこのような活動ができたのか。

宣長の生き方から、現代の若者が大都市ではなく地方を拠点として、学び・働き充実した人生を送るヒントを探る。

①本居宣長記念館への聞き取り調査

本居宣長が、三重で活躍できた要因を探るために、文献調査とあわせて、本居宣長記念館の吉田館長にお話をうかがい、その概要は以下のとおりであった。

【松坂という場所のメリット】

・松坂は気候が温暖で、経済的にも豊かであった。

・新しいことをやろうと思ったら既得権の少ない場所、安定した生活が営みやすい場所を拠点にするほうがよい。あえて距離があること、小回りが利く場所（＝地方）に拠点をおくことに、大きな価値観・権力に支配されないというメリットがあった。また、分からないことをすぐに聞くのではなく、考え、熟成させることができた。

実際、宣長が師事した賀茂真淵は、京都で学び江戸で仕官したという経歴の持ち主だが、宣長は賀茂真淵のように、いわば「大企業」で働く窮屈さを感じ取っていた。また、加賀藩から仕官の話があった際も、松坂を拠点にする意思は変わらず、仕官を辞退している。

・仲間がいること。江戸時代の松坂は、円居（まどい）というサークル活動のようなものがいくつもある、文化的に成熟したまちであった。既成概念と異なったことをしようとしても、一緒に面白がる仲間がいたことが、宣長の研究の深化や、その研究結果の情報発信に役立った。

・宣長の生家の目の前には伊勢街道が通り、伊勢神宮へ往来する人々が行き交い、さまざまな文化の情報が入ってくる場所だった。

・三井家や長井家、小津家といった江戸店持ちの商人の町として栄えた。商人は、長いスパンで物事を考え、入念な準備を行うという考え方があり、このような環境の中で、宣長の考え方も鍛えられたといえる。

【本居宣長個人の要因】

・医師としての安定した収入があった。
・決して内にこもることなく、日本地図を描くなど、自分の置かれている場所を広い視点で把握していた。
・研究だけに注力することなく、自らの研究を積極的に発信し、結果として、宣長に憧れ、宣長のもとに全国各地から人が訪れた。学びの場を自分の住む場所へ引き寄せたといえる。

②宣長サミット

「宣長サミット」では、寺島実郎氏による基調講演「現代に生きる宣長―伊勢志摩サミットのレガシーとして―」や、神戸大学大学院教授の田中康二氏らを迎え、パネルディスカッション「今、なぜ、宣長か」が行われた。その中では、なぜこのような地方都市で最先端の研究ができ、発信できたのかについて、以下のように述べられていた。

・本居宣長が生きた時代は、蘭学事始の時代であり、本居宣長を調べれば調べるほど、彼は偏狭な地域にだけ視界をとった人物ではない。
・彼はこの地にあって、医者として、自分の立ち位置をしっかり守り、ある程度の収入があり、安定した生活基盤を持っていた。

との発言があった。

③総括

①②から総括すると、宣長が松坂で偉業を成し遂げることができた要素として、松坂という土地が、

・気候が温暖で、経済的にも豊か、交通の便もよく、情報も潤沢であった。
・政治･経済･文化の中心から適度な距離を保っていたことで、自由な活動がしやすかった。
・円居（まどい）というサークル活動のようなものがいくつもある、文化的に成熟した町であった。かなりの教養を持った仲間も多かった。

また、宣長自身が、

・若いうちから日本地図を描くなど、松坂にいながら狭い地域だけにとらわれることなく、日本全体のことを俯瞰する目を持っていた。
・医者という安定した収入があった。
・自らの研究の情報発信を積極的に行っていた。

といえる。

6　最終報告に向けた課題と研究の方向性

（１）2030 年頃の学び・働き方の変化の調査

ICT 技術の発達や AI の導入、兼業の浸透など、2030 年頃の人々の学び・働き方はどのように変化しているのかをさらに調査する。

（２）宣長の生き方から学び、求められる施策の研究

（１）を踏まえ、宣長の生き方に学び、2030 年頃の学び・働き方に求められる環境を整えるにはどのような施策が必要かを考察する。

①学ぶ

若者（子ども）の文化教養度を高め、自分の好きなことに取り組む、情熱を大切にできる教育を実現するための施策を検討する。

②働く

ICT 技術の発達や AI の導入などによって生じる時間的余裕を、自身が情熱を注ぐことに充てることができる環境を整えるための方策を検討する。